合同 3-2（歯）

後期高齢者の服薬数と歯科口腔現症・食事状況との関連

－後期高齢者歯科口腔健康診査（LEDO 健診）解析－

〇齋藤寿章、富永一道、西　一也、清水　潤、井上幸夫

島根県歯科医師会地域福祉部委員会

【目的】

島根県歯科医師会は平成 27 年より後期高齢者を対象とした LEDO 健診を実施している。問診票では口腔の困りごと、保健行動、服薬数、食事状況等を調べ、健診票では体格指標として BMI・下腿周囲長、口腔内環境として現在歯数・歯周組織の状態・義歯の適合・口腔衛生状態、口腔機能として咀嚼能力・舌機能・構音機能・嚥下機能等を診査し歯科口腔現症を評価している。本研究の目的は LEDO 健診データを用いて後期高齢者の服薬数と歯科口腔現症・食事状況との関連について探索的に解析することである。

【方法】

島根県後期高齢者医療広域連合から提供された平成 29 年度 LEDO 健診データ 8762 名のうち健診・問診結果の欠損を除外した 7587 名（男/女=42%/58%、70 代/80 代=48%/52%）を解析対象とした。歯科口腔現症・食事状況は健診票と問診票データの各項目を 2 値化した。客観的咀嚼能力は、グミゼリー「ファイン組®」15 秒間咀嚼後の分割数で判定し、0～50 パーセンタイルを「客観噛めない」、それ以上を「客観噛める」とした。主観的咀嚼能力は、問診票の「噛めない物がある」を「主観噛めない」、「何でも噛める」を「主観噛める」とした。服薬数は 0、1～4、5 以上の 3 群に分類した。（解析 1）服薬数と基本属性・歯科口腔現症・食事状況とのクロス集計後 χ^2 検定を行った。（解析 2）BMI・下腿周囲長・歯科口腔現症・食事状況それぞれの 2 値変数を目的変数、性・年齢を調整変数、服薬数を説明変数としたロジスティック回帰分析を行ない服薬数 3 群との関連を検討した。統計解析には JMP13®（SAS Institute Inc.）を使用し有意水準は 5%とした。

【結果と考察】

解析 1 では、服薬数と歯科口腔現症・食事状況の多くの項目との有意な関連が観察された。解析 2 では、服薬数 0 に比べて服薬数 5 の者は、BMI25.0 以上、20 歯未満、口腔衛生不良、口腔機能が低下した者が多く、これらに起因すると思われる口腔の困りごとを訴える者が多く観察され、食事状況に問題のある者も多く観察された。従来報告のあるポリファーマシーと口腔乾燥感や舌の痛みとの関連も示唆された。服薬数と歯科口腔現症・食事状況との有意な関連が示され、歯科口腔の診査と指導には服薬情報の確認が必要であると考えられた。

（COI：開示なし、一般社団法人島根県歯科医師会倫理委員会　承認番号 13 号）